

57. 喪失という名の祝福

医事万華鏡

巷間を賑わす

ニュースの数々。かつては是とされていた考え方が通用しない時代。業界でトップを極めし人々や組織の瞬く間の凋落。その崩壊していく様はあなたも舞台演劇の一場面のようにあります。ただ一寸先は闇。一観客として舞台を観劇している私たち自身も、いつ何時その演者となるかわかりません。これほどまで激しく価値が流動化する様等は、これまで見ることはなかったように思います。

そんな時勢を前にすると、つい鴨長明が記した『方丈記』の一文である、*ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず*——が想起されます。世のすべてのものは常に移り変わり、いつまでも同じものは無いという「無常」を、私たちは今まさに実体験しているのかもしれない。もちろん、平家物語の冒頭にある、*奢れるものは久しからず*——という言葉も同じくです。ここに至って、改めて襟を正して生きていくことが問われているように思うのです。

とはいえ、起きたことすべてに意味があるとも言えます。

しかし私の思いではなく、思し召しのままに（マルコ14章36節）という言葉に則り、頑なな自意識や執着を手放し、流れに任せて生きることもまた、人が生きるための一つの道理であるように思うのです。

さて、巷間取り沙汰されているニュースの当事者が経験していることについては、「喪失」や「崩壊」という言葉で言い表すことができるでしょう。ただ彼らにとって表面的な崩壊以上に辛いのは、突発的かつ深刻な「実存的危機」に見舞われたことではないでしょうか。それは個人であっても組織であっても同じです。しかしです。そこで起きたことを「学び」に変え、危機を克服して自覚的に変容できた暁には、かつて以上の「実り」を、自分だけでなく周囲に対してももたらすことができるはず。なぜなら、内部で起きた変化に蓋をせず、これまで抑圧してきた「影」を統合することで、古い自我は死に、新たな自我が再生され、その新たに生まれた自我は生命力を取り戻し、再び地上に帰還することができるからです。その意味で、喪失や崩壊は、よりよく変わるための「祝福」であるとも言えるのではないのでしょうか。

跳ぶ前には屈むことが必要です。より高く跳躍するには、より多くの屈む距離と時間を要します。いつかの苦悩（の深さと長い時間）の経験が、一回り「自分」を成熟させた——。その変化がまざまざと見えたとき、*過去はもう良し*——と言える寛大な人間でありたいものです。やり直すのに遅すぎるということはないのですから。（JMS主幹・野村元久）

